

H29 校内研究反省のまとめに対する見解

1 研究の成果

(1) 「子どもの解決したい問題」について、問題と課題との違いを捉えたことについて

全体研の研究授業で、協議の際に話題にあがった「子どもの解決したい問題」とはどんなことを指すのかという事は、回数を経ていくうちに、徐々に全体として共通理解を図れた。活動名は「学習問題」ではないこと、子どもが「おや?」「なぜだろう?」「どうすればよいのだろう?」と思うことが「解決したい問題」＝「学習問題」であるという共通理解ができた。単元構想を作っているうちに、子どもの思考がないがしろになり、そのような活動をさせることでねらいに到達できるという筋道を立ててしまいがちである。子どもが思っていることに対し、教師として、どうやって場を作ったり、投げかけたりすると、どう思考が変化するかを予測しながら、単元構想を書いていく必要がある。

(2) 学級経営検討会について

学級経営検討会については、多くの先生方に「参考になった。」「よかった。」という感想をいただいた。特に、若い先生たちには、「書き方」「実態に対する手立ての組み方」「校内研究と学級経営のつながり」「年間の見通し」など、様々な要素が参考になっている。また、専科やＴＴの先生方から、多角的に学級の実態や子どもの様子について見ていただくことで、自分にとりないものが見えるなどの利点もある。互いの学級経営について具体的に、客観的に情報交換したり、アドバイスしあったりすることで、学ぶこともより増えてくると考えられる。また、検討会で話したことも、学年やブロック内での子どもの名前を出しながら話し、時には授業の様子を見合ったり、交換授業をしたりしながら、研究の土台の部分や研究につながる授業実践について話す機会をもつことを今後も大切にしていきたい。

(3) ブロックテーマを意識して研究をすすめたことについて

昨年度末の反省で「ブロックのめざす児童像」が活用できていないことから、「①学級経営案」「②指導案」「③研究協議」の３回で、必ずそこに立ち返るように提案してきた。本年度は、そこを意識して声をかけてきたことで、きちんとそこに立ち返って学級経営や研究授業を考えることができていた。最後の学級経営検討会でも、ブロックテーマに照らし合わせた、子どもたちの育ちが、具体的な子どもの名前を挙げながら報告されていた。ブロックテーマを意識することで、逆に、実態とブロックテーマに隔たりを感じるようになってきたり、文言に違和感を感じたりする場合もあった。その点については、今後、実態に合わせて、「小テーマ」を見直したりする必要があると考える。

2 研究の課題

(1) ブロックでの研究をより深めるために

今年は、ブロックテーマを意識しながら研究を進めてくることができたという成果の一方で、ブロックテーマに向けてどう取り組み、子どもたちはどんな変容があったかについて、最後に検証する場が必要であったと考える。これまでは、各々の学級の子どもの実態、学級経営、経験年数、教師の個性などで様々な要因があるので、一概にこの方法がよいということはいえず、学級経営検討会で自己の実践を振り返ることで終わっている。しかし、実践の反省や学級経営案の振り返りをし「なんとなく」終わってしまうのではなく、ブロックテーマに向けてどんなことが良かったのか、悪かったのかを振り返る場を少しでも取っていくことで、さらに成果と課題が明らかになっていくと考えられる。場の設定の仕方は、また検討していく必要がある。成果と課題はその年ならではのものであるので、次の年に必ずしも全てが引き継がれるものではないが、参考にはなるものであり、自己の実践に生かすことができるはずである。

(2) 秋に集中する研究授業→ブロックでの研究計画の必要性

全体のテーマの元、ブロックテーマに向けて、研究を進めていっているが、やはり秋に実践が集中してしまっているようだ。「他のブロックを見に行けなかった。」という意見が聞かれるが、ブロック間のつながりを見ることはとても重要なことと思う。

「高学年でこういう子どもたちにしたいから…今こうしなくては。」のような観点も必要である。秋に集中することで、もう一つ大変なのは検討の時間の確保だ。今回も各学年の推進委員の方々に工夫してとってもらった。そこで、ブロックで研究計画を立て、「指導案の書き方」「単元構想の書き方」などを理解した後に、「こんな授業を目標していこう。」というものを、各ブロック1本ずつ夏休み前までにできると良い。

(3) 子どもと共に創る授業を目標して～子どもを能動的学習者として～

単元構想について、「もう少し」「できなかった」「分からなかった」という反省があった。もちろん完璧にできることなどない考える。思考を大切にすればするほど、子どもたちをよく見とる。自分の見とりと異なることは多くあるから、単元構想に修正が何度も必要であったのではないかと考える。だが、その修正こそ、自分たちの生の授業における、「子どもをみとり、気づく力」になっていると考える。

ただ、単元構想を作る上で、子どもたちの「解決したい。」「友だちと話したい。」と思う場面を見ようとするあまり、そういう話し合いの場面ありきになってないだろうか？「話し合う場面を設定するにはどうするか？」ではなく、子どもがその場面を必要とするから設定する必要がある。本当に必要と思っているかどうか、目の前の子どもをよく見て考えなければならない。子どもたちが違えば、その集団や個の思考は異なるから、単元構想も変わってくるし、見通しからはずれた予想や意見が出たりすれば、単元構想の修正が必要である。(研究授業の教科が違って)多くの学年で、その研究授業が近づくにつれて、同じ単元を流し、子どもがどうだったかを検証し合っている姿が多く見られた。同じ所を一緒にやるからこそできる深い教材分析の上にたち、さらにクラスで異なってくる授業展開に、学級経営検討会で理解したそのクラスの子にあわせて、お互いがアドバイスをしあえることが大事であると考える。

(4) 「子どもが解決したい問題」「ひびき合う姿」の共通理解

「ひびき合う」とはどんな姿なのか、発達段階によってどうイメージしたら良いのかをもう一度考える必要がある。

全員が話せば「ひびき合った」と言えるのか？「ひびき合う」前の思考過程で「教える」ことがあってはいけないのか？

継続的な探究ができていく低学年の子どもたちにとって「解決したい問題」とはどんな問題なのか？いろいろな声の研究の最後まで聞こえてきた。子どもの思考によりそって授業をつくると、教師の意図的な関わりをどこに置くのかが非常に大切である。「ひびきあう姿」を目標して、教師の出どころを考える必要がある。